平成23年度　三重県教育改革推進会議第２回第３分科会　議事録

Ⅰ　日　時　　平成23年９月５日（月）　10：00～12：25

Ⅱ　場　所　　ホテルグリーンパーク津「葵の間」

Ⅲ　出席者　（委　員）植村　久仁子、多喜　紀雄、浜辺　佳子、皆川　治廣
（ゲストスピーカー）中村　直美
（事務局）長野研修分野総括室長、田畑社会教育・スポーツ分野総括室長、
平野教育総務室長、野原社会教育・文化財保護室長、
西口小中学校教育室長、藤田教育改革室長、
中川教育総務室主査、森高校教育室指導主事、
小中学校教育室：黒川指導主事、藤原指導主事、仲地指導主事、
教育改革室：清水、北原、谷奥、寺、辻、山路、若林
以上２３名

Ⅳ　内　容

（事務局）

それでは、みなさま大変お忙しい中、また朝からご出席いただきまして、ありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまから平成２３年度三重県教育改革推進会議第３分科会の第２回目の会議を開催させていただきます。

それでは、事務局のほうから、第３分科会担当の総括室長長野よりご挨拶申し上げます。

（長野総括）

こんにちは。みなさまにおかれましては、８月１１日の第１回の会合の際には、いろいろ貴重なご意見をいただきありがとうございました。事務局としても取りまとめまして、今後に生かしたいと思っております。

本日はゲストとして、交通新聞社の中村直美さんに来ていただきまして、ありがとうございます。お忙しい中を、無理を押して来ていただいております。せっかくの機会ですので、フルに意見をお伺いして今後に生かしていきたいと思います。

中村様は松阪市の出身でいらして、高校まで三重県にいらっしゃったということでございます。「旅の手帖」の編集に１０年間かかわってみえて、しっかり三重県のことを載せていただいています。三重県に育つ子どもたち、また県民が、郷土を誇りに思って、自分の基盤とするものをきちんと持ったうえで国際社会に羽ばたいていくことを目指していけたらと思っております。本日のゲストスピーカー中村様におかれましては、観光振興や地域づくり、いろんな経験をお持ちですので、人数が少ないのは寂しいのですが、逆にいろいろと深いお話を聞かせていただけるのかと思っております。委員のみなさま、中村様、座長の皆川様どうかよろしくお願いいたします。

（事務局）

それでは、ここからの進行につきましては、皆川座長にお任せしたいと思います。

（座　長）

それでは、本日は第２回目の第３分科会ということで、始めさせていただきます。前回に続きまして、本日も委員のみなさま方の忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。この後、旅の手帖の中村様からご講演をいただいた後に、前回の審議を踏まえまして、事務局より資料が数種類出されておりますので、その説明をはさみながら、中村様のご講演内容と併せて、郷土教育の推進の具体的方策に係る議論を深めたいと思っております。

それでは、ただいまより、中村直美様の方からご講演をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（中　村）

「ご講演を」と言われると、それだけで緊張してしまうのですが、すみません。観光の会議ではここのプロフィールでも書いてもらいましたように、北は青森から南は長崎まで、いろいろな県の部会にも入れていただいたりしておりますが、教育委員会でこういう会議に出るのは本当に初めてで、今回はちょっと恐れ多い感じでお断りをしたかったのですけど、でも、私も三重県で高校まで学びましたし、こうやっていろいろ携わらせてもらって「みえの国観光大使」の末席にも入れても

らっているので、三重県の子どもたちのことを考える時間があっても良かと思い、お引き受けしました。みなさまには申し訳ないのですが、２週間ぐらいは送っていただいた『三重の文化』とか、みなさんがご審議していただいている内容とかも拝見さていただきながら、何かお話ができれば良いなと思っていました。もう一つは、子どもがいませんので、子どもの教育のことは直接には良く分かりません。間接的にしか分かっておりません。ただ、三重県の教育ということでは、弟のところに甥と姪がおりまして、もう二人とも大学生、社会人になっていますけども、ずっと三重県で教育を受けていましたので、彼らを通じては聞いたり見たり、「これで良いのかな」と思いながら過ごして参りました。ずっと東京におりますが、年に５、６、７回は松阪に帰ってきていますし、今年の８月も熊野の花火に行ってきました。一生懸命やりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

取り敢えず、どんなことをしている人間がしゃべるのかということを分かってもらった方が良いと思ったので、『旅の手帖』を持ってきました。５月号ですけれども、上野城が載っております。３８ページからです。私も松阪の人間で、松阪のことは結構知っているつもりなのですが、上野城が大阪城に次いで日本で２番目に石垣が高いということは、知りませんでした。『三重の文化』に書いてあったかどうか分かりませんが、天守閣は後で作られたものだということは知っていましたけれども、石垣のことは知りませんでした。松阪は石垣しかありませんが、私も小さい頃から松阪城趾にはよく行っていました。地元の人たちに「ここは大阪城の石垣を作った人たちと同じ人たちが築いた石垣なんだ」と聞いていました。「野面積み」と言うんですか、自然の石を組み合わせて作った石垣で、話によると、滋賀県の大津の穴太衆という石工の集団が築いた石垣で、自慢しても良い石垣だと、子どもの頃から聞いていました。１年前にも城特集をやったのですが、うちの読者は中高年で、普通の人の２倍ぐらい旅行好きの人が多いので、城特集は前回も売れたんです。この本も結構評判が良くて、中高年の方がもうそろそろ定年になって、「ゆっくりもう一回日本国内、日本文化を見たい」という人が多いのか、少し文化的なことを掘り下げたフレーズが載っている特集をやると、雑誌が売れるので、こんな城特集をやっています。

これ５月号なんですけど、４月１０日に出ました。ご存じのとおり３月１１日に東北大震災があって、弘前城も載っているのですけど、弘前が桜祭りをやってくれなかったら、ここに弘前城は載っていませんでした。３６、３７ページには埼玉県の行田の忍城というのが載っていると思うのですが、このトピックスという囲みの中に「のぼうの城」とあって、野村萬斎さんの顔写真が載っているところがあると思うんですけど、この本を出した４月１０日の時点では、今年の秋にこの映画が公開される予定だったんですけども、水攻めのシーンがあるということで、東北大震災に配慮して、来年の秋の公開になりました。本は毎月、毎月売れないといけないので、売れる企画は何だろうと思ったり、震災はしょっちゅうある訳ではありませんが、只見線もこの前取材しようと思っていたら鉄橋が崩れたりとかありますので、「の台風の季節にここは大丈夫かな」とか、「何が今流行っているんだろうか」とか、そんなことを日々考えながら、こんな雑誌を作っております。

私が三重県の出身だから、伊賀上野城が大きく載った訳ではありません。４７都道府県平等にするつもりで編集しています。伊賀上野城やその後にも「築城の名人は」として、４３ページ藤堂高虎が載っているのですけども、この号にこれが載ることになったのは、三重県の観光連盟や観光局が、東京で年に１回、マスコミにプロモーションの会をやられています。毎年２月頃にそういう会があるのですけども、その時に、高虎の「唐冠形兜（とうかんなりかぶと）」という、ウサギの耳みたいな兜を観光担当の方がかぶってみえて、それが大変ユニークな兜で、東京のマスコミの人たちの印象に残って、載ることになりました。大体これが邪魔で、まっすぐ歩けなかったんですね。蟹のように横に歩いていらしたのですが、プロモーションですから、印象に残らなければいけないという意味では、一つのインパクトだったと思うんです。そういうことで初めてその兜を見た編集担当が、「あれ面白いし、城特集やるんだったら築城の名手ということで、藤堂高虎のページ作ってみよう」ということになり、この記事ができました。

私はこんなことをずっとやっていますので、各県の文化的なことを勉強しなければいけないし、知らなければいけない立場に、今まで３０年くらい立っています。そんな人たちに、「三重県の出身です」と言う機会は、普通の会社の営業の銀行員さんとか、商社の方とかよりは多いですし、名刺出してしばらくして話をしているうちに、三重県の話題から話のきっかけをつかむということも、大変多いです。ただ、４７都道府県、いろいろな県の方々と接しますので、三重県の話をどのタイミングで、どのくらいするかというのが、とても難しいです。他の県のプロモーションに来ているのに、三重県の話ばかりしてもしょうがないし。でも他の出版社、他の新聞社の人より、編集をし

ている私は、より深いコミュニケーションを取って、面白い地元の情報や、読者に受けるような情報を引き出さなければいけない立場にありますから、三重県ネタの使い方はすごく難しいと感じています。先ほど「みえの国の観光大使」にしていただいているという話をしましたが、名刺を作っていただいても、他のみなさんのように渡す機会は、なかなかないんです。東京から人が来て欲しいと思っている、奈良県や滋賀県、岐阜の方もみえるので、ご近所同士でいわばライバルなところに、「ああ、中村さん三重県出身だったら、三重県のことを先に書くんだろうな」と思われるのは心外なので、その辺は難しいところがあります。

今回この『三重の文化』を見せていただいて、ここに載っているものの中で、私が一番使うのは何かなと思ったのですけど、多分１２０、３０くらい項目があると思うんですが、相手が知っていなければまず意味がありませんし、自分で知っていてワンフレーズぐらいコメントできるものは、全体の３分の１ぐらいでした。何か聞いたことがあったり、良く知っていたりで、何か言えるなというのが、３分の１くらいありました。三重県は縦に長い上に旧国名でいうと４つの国があるという特徴があるのですが、私は松阪の人間ですので、北のことはあまり知らないと思いながら拝見していました。県に旧国名が４つもあるというのは、多分多いですね。兵庫県が５つ旧国名があるんですけど、三重県は多分その次だと思います。伊賀と伊勢と志摩と紀伊という４つの国にまたがっているということは大変特徴的なことで、三重県の文化を語る上では強みだろうと思っておりましたし、この『三重の文化』を見て改めて、そんなふうに思いました。

さきほどの「何が一番分かりやすくて無難か」という話では、私松阪の出身ですので、松阪牛がまず思いつきます。松阪牛は、大体日本全国どんな人でも、イントロとしていけます。気をつけなければいけないのは、米沢、近江、神戸とか、牛ライバルのところの人としゃべる時は、相手の気分を害しないように、「松阪牛が一番だ」と言ってはいけないじゃないですか。でも、滋賀県の近江八幡で、毛利志満さんという近江牛のすき焼きをやってみえるお店があるんですけども、その社長さんによると、「松阪の和田金さんとはしょっちゅう話はするけど、好きな牛の系統、ＤＮＡが違う。近江牛で買いたい牛と、松阪牛で買いたい牛は元々選ぶ子牛が違うから、ケンカにならない」という話を聞いたことがあって、そういう意味で言えば、同じ霜降りの牛で有名でも、そういうことを知っていれば、松阪牛の話題もまた膨らんでいったりすることもあります。普通に「三重県です。松阪です」と言うと、「良いなあ。おいしい牛肉食べて育ったんだな」というところから、「ホルモンの店もあるんですよ」とか、「第２和田金と言われているんですよ」、「安くても食べられますよ」みたいな話から仲良くなって違う話に発展する、ということもあるなと思います。

東京にいると、三重県のことで使いやすいのは三井高利で、昔買った『知恵は富なり　三井高利のすべて』という漫画本を持ってきました。これは松阪の青年会議所が出していて、私は多分松阪にある「木綿手織センター」で売っているのを買いました。三井高利は『三重の文化』にも松阪商人で載っていました。「三越の前身の越後屋を作った人」と言うと、「三越って三重県なの」みたいな話になって、自慢することができます。

それから松阪木綿、伊勢木綿、熊野の市木木綿も全部載っていましたけど、ブルーの縦縞の松阪木綿は、歌舞伎で「松坂を着る」という歌舞伎用語があるらしいですね。それは、松阪でずっと郷土史を教えてくれていた田畑美穂（よしほ）先生、亡くなられましたけど、その先生からいろいろお話をお聞きする機会があって、教えてもらいました。縦縞を着ることを歌舞伎の用語で「松坂を着る」と今でも言われているという話は、これまたちょっと東京でも自慢できたりします。

残念なのは本居宣長が、なかなか難しいことです。松尾芭蕉に比べると、ブランド力という意味で、残念ながらちょっと辛いと思います。

私今、こう見せてもらって、ここ何年か自分の課題だと思っているには、同じ三重県の有名人なのに松尾芭蕉のことを、もうちょっと知らないといけないということです。各地へ行きますと、松尾芭蕉が東北の人だと思っている人も多いし、松尾芭蕉がここでこういうことを詠んだとか、奥の細道でこういうことをしたとか、東北はもちろん、北陸の温泉に行っても、ここで曾良と別れたとか、どうもケンカしたらしいとか、そういう各地で我がふるさとの芭蕉先生のことを聞くのに、自分が結構松尾芭蕉のことを知らないなと感じています。もうちょっと勉強しておけば良かったし、近頃忍者屋敷ばかり行っていて、そんな機会が無かったのが、とても残念です。

『三重の文化』にはフラットにたくさんのものが載っていますけれども、私みたいな仕事をする人ばかりでないにしても、「何が他の県よりすごいとか、他の何よりこう違う」ということが言えないと、意味がないと思います。例えば伊勢エビが載っていましたけど、伊勢エビという名前がついているのに、漁獲量は千葉県が一位で、それでも千葉県に比べて三重県は禁漁の期間が多分長い

と思うんですよね。この前も千葉の館山の人が会社へ来た時に、８月だったと思うんですが、もう千葉は「伊勢エビ祭りをやって旅館で出します」という話で、「早い」と私は思いました。三重県は資源保護のために、多分禁漁の期間が長いのだと思います。そういうことも知っていると、別に２位でも良いじゃないという話にもなりますので、そんなふうに思って『三重の文化』を読んでいました。

先ほどの縦に長くて４つの国があるという話でいうと、同じ伊勢の国でも、私は伊勢うどんを高校に行って初めて食べました。今でこそ観光の分野で伊勢うどんは認知度が日々高くなってきていますけども、松阪の人間は、当時伊勢うどんを食べたことがありませんでした。高校に行ってあの黒いうどん出てきて、本当にカルチャーショックでした。みなさんの議論にも、「外に対して自分の地域の自慢を言える子どもを育てよう」ということがありましたけど、同じ県内でも地域の違うところに行くと、全然違う文化があるので、わざわざ遠いところへ行かなくてもごく近所で体験できるのが三重県かと思いました。

私が高校に行く時、三重県が東京都と同じ学校群制度を取り入れることになりました。私は高田中学に行っていたのですけど、友達はみんな津高に行くのに、松阪の子は伊勢高でなければ行ってはいけないと、受験の何ヶ月か前に言われた記憶があります。私たちにしてみれば、南に行くほど田舎という感じがありましたので、「伊勢高か」と思いながら、行くことになったことを覚えています。でも、今は結構感謝しています。伊勢高は当時、松阪以南の熊野、紀宝町の方の子までみんな来ていましたし、志摩の子たちはみんな下宿していました。なので、異文化だらけでした。尾鷲の子の言っていることはさっぱり分からないし、ちょっと雨が降っただけで長靴を履いてくるとか、骨の多い尾鷲傘をさして来るとか、面白いことがたくさんありました。志摩と一括りにしていますけれども、和具と越賀だけでも、それぞれの湾で文化が全然違って、そういう子たちが集まっていたので、刺激を受けることもとても多くて、そんな付き合いが未だに東京で続いていたりします。高校の同級生が３０人ぐらい東京に居て、三重県の話をしながら、仕事以外に楽しい時間を持たせてもらっているのは、伊勢高に行けたお陰だと思っています。熊野の花火も、熊野出身の子がちょうど帰省していたので、帰りは松阪まで乗せてきてもらいました。当時学校群制度に変えて、「松阪の子は伊勢高へ行け」と言った人に、今となっては個人的に大変感謝しております。

自分が小学校の時、どんな郷土教育を受けていたのかということも、今回の話をもらって、ちょっと振り返ってみました。もう半世紀弱も昔の話なので、今と違うんだろうなと思いますが、一番ベースにあったのは松阪第１小学校の時に教えてもらったことだと、改めて思いました。当時松阪第１小学校では、いろいろなことをやらされた記憶があって、その言い訳だったのかもしれませんが、「ここはモデル校だ」と言われていました。まず校庭に「岩石園」というのがありました。三重県のいろいろな石が区分けして、「これが何とか岩、これが何とか岩」と木の立て札があったのですが、全然覚えてないので、私は興味がなかったのだと思います。そういうものが学校の校庭にありました。

また廊下には、今で言う三重県特有の「まちかど博物館」にあたるような、廊下博物館がありました。当時は昭和３０年代ですから使ってないような農機具とか、脱穀機とか、そういうものが廊下に置いてありました。廊下を歩きながら、しょっちゅうそんなものを眺めていていました。階段の上にもいろいろパネルが張ってあって、月の満ち欠けや、１年間で太陽が松阪の風景のどこから出て沈むのかを示したようなものが、張ってありました。

昔はそんなに、お父さんお母さんも心配もしないだろうし、交通量もなかったのかもしれませんが、社会科見学もたくさん行きました。松阪の丸二青果という青果市場に行ったら、うち実家が果物屋なので、うちの親父が説明に出てきて、すごく嫌だったのを覚えています。敷島パンの工場にも行って、パンをもらって、みんながすごく喜んだのも覚えています。万古焼きも行きました。四日市コンビナートも行きました。四日市コンビナートって、当時は多分まだ喘息とか言う頃だと思うので、今にして思えばよく行ったなと思いました。でも今四日市のコンビナートって、観光の分野では夜景萌えとか、工場萌えとか言われていて、全国の工場観光とか夜景観光をやりたいところ、やっているところと横つながりもあって、クルーズもすごく人気があるんですよね。それと豆腐屋さんに行って、豆腐を作るところを見せてもらって、初めて豆乳というのを飲んだらすごくまずかった、ちょっと焦がしたらしいんですけど、そんなことも覚えています。本居宣長神社とか松阪神社に、「どんぐり拾い」と私たちは呼んでいたんですけども、どんぐりを拾いつつ、腐葉土を取りに行っていました。一人一鉢運動というのをやっていて、朝顔を全員で一人一鉢育てていたので、それ用の腐葉土を取りに行っていました。１年生から６年生まで潮干狩りにも行っていました。大き

い蛤を取った者が一番という大貝競争をやっていたので、みんな大きい貝を取るのに必死でやったのも覚えています。外との異文化交流という意味では、大阪の恵美小学校という学校と、文通をしていました。私たちは５年生の時にその文通相手に会いに、大阪城に行きました。６年生の時に恵美小学校の子たちが鳥羽に来て、御木本真珠島で会いました。私が恵美小学校の子にどんなことを書いたか覚えていませんが、多分三重県のことを書いていたんだと思います。

もう１つ今回のことで「ああ、そうか」と思って、自己発見したのは、遠足はだいたい歩いて行っていましたけど、白米城、正式には阿坂城というところに行き、次に山室山に行きました。山室山は『三重の文化』にも載っていますけど、本居宣長の奥墓があるところです。本居宣長という人は桜が好きで、「自分の墓に山桜を植えよ」と言ったと聞いて、この人は自分の墓のことまで考えたのかと思って、すごいなあと思いました。本居宣長、山室山はすごくインプットされていました。子どもの頃、本居宣長が何をした人かというのは、あんまり分からないんですけども、松阪の鈴の屋に行かれた方も多いと思いますけれども、何が印象に残っていたかと言うと、取り外せる階段があって、四畳半ぐらいの小さい鈴の屋にずっと籠もって勉強していたということです。子どもにとっては「階段を外されたら困る」ということがすごくあって、この人はすごい忍耐の人だなというイメージが残りました。実はこの前実家を掃除していたら、小さいカメラを当時買ってもらったのですが、そのカメラで奥墓や鈴の屋、本居宣長の髪の毛が入っている樹敬寺というお寺などを自分で写真に撮って、説明を付けて、夏休みの研究にしていたことを発見して、「あっ、今の仕事のもとになるようなことをしていたわけだ」ということを発見しました。意外とちゃんと字もきれいに書いていて、多分遠足と、学校でみんなで行った鈴の屋の階段のことが印象に残って、そんなことになったのではないかなと、自分で勝手に考えていました。

中学生になるとみんな忙しくもなるし、他のことに興味も出てくるし、なかなか郷土の自然や歴史に興味を持ってくれる人が少なくなります、というようなデータが書いてあったのですけど、それは今の時代、しょうがないなと思います。高校生になったら、もっとなおさらだと思いました。もし徹底的にやるんだったら、小学校の時ではないかと思います。みなさまの前回の会議の中でも、そういう発言をしていらっしゃる方がいましたけど、自分のことを振り返っても、それは人すき好きで、それが仕事になるかならないかは別にして、趣味になっても良いと思うのですけれども、小学校の時にいろいろなものを見たり聞いたりさせてあげるというのは、一番将来的に効果があるのではないかと思いました。全部で実施できないのだったら、小学校をまず一生懸命やってみるというのも、１つの手かなではないかと思いました。そういう意味では、残念ながらこの「三重の文化」は、「中学生向け」と書いてあるので、若干難しいかと思いながら見せていただきました。

あと、いくつか他の県のことも話させてもらいたいと思います。先週山口県に行っていました。なぜ行っていたかと言うと、「萩往還」という、山口県内の萩から防府という、山陰から山陽まで参勤交代用に、一番早く出られる道があります。それが５３キロで、埋もれていたところもあったのですが、それを掘り返したり整備したり、標識をたてたりして、観光客にそこを歩いてもらおうということで、山口県が今年から来年にかけて萩往還を大いに売り出そうとしているわけです。熊野古道も興味があって歩いてらっしゃる方、いっぱいいますけど、東紀州の担当部署の方に聞いたところでは、世界遺産になって６年か７年目になって、普通のハイキングでは意味がないので、改めて歴史の道として歴史を感じながら、普通のウォーキングやハイキングとは違うということを、もう一回熊野古道を歩いている人や、知らない人に伝えようということを、今考えていらっしゃるみたいです。山口も萩往還ということで、もう一回東京のマスコミの人たちにも実際歩いてもらいたいということで企画していました。実はそこは吉田松陰や坂本竜馬とか、幕末の志士たち、去年の「竜馬伝」に出てきたような人たちがみんな歩いた道だということで、福山雅治の顔も浮かぶような道で、観光的にはそういう意味もあって、売り出すには新鮮でとても良い訳です。その萩往還を歩いた後に、バスガイドさんが「昔の藩校に明倫館という藩校があって、その後に明倫小学校というのが建っています。その明倫小学校の子どもたちは、１年生から６年生まで吉田松陰の言葉を朗唱しています」ということを教えてくれました。だから明倫小学校の子どもに会うと、３年生はここまで言えるとか、地元の人も知っているわけです。今回こういう機会があったので、明倫小学校のホームページを見てみたら、１年生から６年生まで覚えるものがちゃんと書いてあって、これは１年生の朗唱文をプリントアウトしてきました。結構難しいんですよね。１年生３学期にやる「親思う心に勝る親心、今日の音ずれ何と聞くらん」というのは、吉田松陰が死ぬ前に辞世の句として家族に送ったという、手紙か何かに書いてあったものが、いきなり１年生の３学期に覚えるものとして出てきていて、びっくりしました。６年生に至っては、もっと長いものが書いてあったのです

が、これを毎朝朝礼の時にやるんだそうです。すごいなと思いましたけど、意味が分からなくても、やはり小学生は覚えるようです。そして街中で会って聞いても、ちゃんと言えるそうです。興味を持ったので、明倫小学校の「学校便り」というのもプリントしてきました。これ６月の分なのですけど、明倫小学校にまつわるクイズが載っていました。これは多分お母さんたちが見るのだろうと思いましたけれども、子どもたちと一緒にこれを勉強して、「答え合わせはまた１９日にね」となっていて、ここにすぐに答が出してないところがまた良いと思いました。

「広報みえ」とか、市町村の広報にこの『三重の文化』の中の原稿を入れてもらったり、あるいはもう少しこれを小学生用にリライトして入れてもらったりすれば、親にも知ってもらえるのではないかと思いました。親が知らなければ子どもにもしゃべれないし、正直言ってこの冊子を丸ごとボンともらっても、なかなか難しいものもあるので、人数分作る予算をかけるほど、みんなは見ないのではないかと思います。印刷データをそのように使ってはどうかと思いました。松阪の子はまずは松阪とその隣からといったように、その部分の抜粋だけでもうまく活用できないかと、見せていただいた限りで思いました。

もう１つ、「かるたを作ろう」という案が載っていたので、群馬県の上毛かるたの一部が分かるようなページを、プリントアウトしました。私も現物は知らなかったので取り寄せてみました。会社のスタッフに群馬県出身の子がいて、よく「上毛かるた」と言います。群馬県民はビックリするほどみんなこれが言えるんですよ。群馬で小学校、中学校と育った人間で、これを言えない人はいないというぐらい、浸透しています。これは昭和２２年にできたかるただそうで、絵とかすごくレトロで、全然今風ではないですよね。「ち」というところにある「力合わせる２００万」という群馬県の人口を詠んだ札があると思うのですが、この札だけは数字を入れ替えるのだそうです。でも他のものは、とても普遍的な内容になっているので、基本的に変えないということでした。読み札の裏に補足としていろいろなことが書いてあって、「誇る文豪　田山花袋」と書いてあっても、その文言だけをバカみたいに覚えてもしょうがないので、田山花袋はどんな人だということが、読み札の裏に書いてあります。これは昭和２２年にできたのですけど、後の二松学舎大学学長になった浦野匡彦さんという人がキリスト教伝道者の津田正規さんという人と出会って、ＧＨＱに占領されている中で、日本の文化が「これしてはいけない」と制限される状況の中で、何とか上州群馬の文化を子どもたちに浸透させたいということで、できたのだそうです。詳しくはネットで見てもらえば、いろいろと書いてあると思います。それがずっと使われて群馬県民に浸透しています。その土地の名産も載っていれば、地元の偉人も載っていれば、という内容になっています。ただこれは「地域的なばらつきまで配慮しなかった」と書いてあるので、これに漏れたところは残念ながら未だに関心が薄く、私の部下は群馬県の板倉町という栃木よりにあるところの出身なんですけれども、群馬の人に「群馬県の板倉町です」と言うと、「どこそれ」といった反応で、本当にはっきりしていてみんな知らないんです。逆にこれに載っているところの浸透度は、かなりすごいです。これは一人対一人か、三人対三人という競技の仕方をするらしいのですが、「鶴舞う形の群馬県」という最初の読み札をまず２回読んで、ちょっと一息入れるというルールです。「鶴舞う形の群馬県」をまず読むので、取り敢えず一番先に覚えます。私でさえ、「あっ、群馬県は鶴舞う形」ということが、刷り込まれてしまいました。今度作られるかるたが、１０年か後にそういうものになれば、とっても良いなと思っていました。完成形というのは、なかなか一度に難しいと思いますけれども、案ができたら実際に何回か小学生や中学生にやらせてみて、「分からない」とか、「これはどう」ということがあったらブラッシュアップして、長く三重県に浸透していくようなものが作られれば良いと思っていました。

郷土教育ということでいろいろな人に教えてもらっても、話だけではつまらないことあります。『三重の文化』にも、例えば「伊勢茶はおいしいです」とか書いてありますが、それだったら万古焼きの急須で伊勢茶を入れる体験をさせてあげたら、良い体験になるのではないかと思いました。聞いて、見て、ちょっと動いたりするということは、脳が刺激されて記憶中枢に残ると証明されているようなので、そんなことも、もしかしたら三重の文化としてできないかと思いました。

最後に、私は今日、ちょっと三重県弁でちょっと東京弁も混じっているんですけど、東京では一応標準語を使っていて、名古屋を過ぎるとこちらの言葉になります。方言というのも、今すごく観光の分野で見直されていて、駅前の風景や国道沿いの店が日本全国同じになっても、その土地に行って方言を聞くことでその土地らしさを感じるということも、よく言われます。若い人は知らないかもしれないけど、松阪では眩しいことを「お日さんがあばばい」と言ったりします。松阪の子たちは掃除するときに「机つる」と言うのですが、東京へ行って笑われました。あれは三重県の方だ

けで、みんな引っ掛けることしか「つる」と言わないので、「運んで」と言わないと通じません。「とごっとる」というのも通じないです。でも、それがどういう意味かといのが分かって、覚えていることは、とても素敵なことだなと思うので、方言も文化教育の中に入れられたらと思いました。以上です。

（座　長）

ご経験を踏まえた面白い話を、ありがとうございました。いろいろと質問させていただきたいのですけど、全体審議の方でまたご質問させていただきますので。

それでは事務局より、資料説明がございますので、第１回会議におきましては、学校が家庭や地域と連携した郷土教育の取組を進めていく観点から議論いただきました。一つは「三重の教育」の教材の活用についての話が出てまいりました。それから高校生のインターンシップや職場体験、社会体験などの取組につきまして、あるいはコミュニティ・スクールの取組につきまして、有意義なご意見を頂戴いたしました。それらに関します資料がありますので、事務局より簡単にご説明をお願いしたいのですけども。

（長野総括）

先にちょっと休憩をいかがでしょうか。

（座　長）

では、５分程度休憩をしていただきます。

（11 時 05 分休憩）
（11 時 10 分再開）

（座　長）

それでは前回のトピックスにつきまして、資料を説明していただきます。

（事務局）

「三重の文化」とか、いろいろと興味深いお話をありがとうございました。私ども小中学校教育室として推進しておりますことについてご説明申し上げたいと思います。お手元に資料があるかと思いますが、小中学校におきましては、身近な地域や県の様子について学習するのは、主に社会科や総合的な学習の時間等で実施をすることが多ございます。そのなかで郷土を愛する心とか異なる文化とか歴史とかそういうものを理解する態度の育成を図っているのが現状でございます。

１ページめくっていただきますと、別紙１に今現在特色ある郷土学習として取り組まれている学校を、挙げさせていただきました。さきほどお話にありましたように、三重県は南北に長いということで、特色ある学校も、北のいなべ市の「ほたる」、佐佐木信綱、さきほど話の出ていました松浦武四郎、松阪牛、さらには安乗文楽、伊賀焼、尾鷲の林業や漁業、さらには熊野古道の語り部など、特色ある郷土学習が現在も県内の学校で行われているところでございます。一番私たちとして大事にしてきたのは、三重県について、子どもたちが自信をもって発信できる、それだけのものをある程度まとまったものとして、知ってほしいということで、さきほどから話に出ております「三重の文化」を、昨年度作成させていただいて、主に中学校を中心に配付させていただいたところです。これについては、前回もお話をさせていただいたと思うのですが、１学年の生徒が１度に使うことができる分の数を各中学校に、さらには、小学校と県立学校、あるいは地域の図書館にも配付をさせていただいて、置いていただいているというところでございます。当初反響が大変多くございまして、これをｗｅｂホームページ上に上げさせていただいている状況でございます。とにかく、三重の歴史、自然、文化などを１つにまとめて、これからこれらをもとにしながら、子どもたちが、他の県、他の地域に行ったときに、「自分の県、自分の郷土にはこんなものがあるのだ」ということを発信できる、その元になったら良いと思って作成をさせていただいたところでございます。

これがさきほどのお話にもありましたように、中学校バージョンとして、小学生には難しいのではないかということで、次に出てきたのが、小学校あたりから常に覚えられて、三重県のことが分かっていけるかるたを作ったらどうだ、ということです。なんとか、小さいときから三重県について覚えて、そらんじて言えるようなったら良いということで、これから、そのかるたの制作に入っていって、効果的に使える方法を探っていきたいと思っています。おっしゃっていただいきましたように２９市町ございますので、その市町のことをいかにこの中に入れ込むかというのは、一つ、私どもとして、今後考えていきながら、本年度、なんとか句の制作くらい、作れたらと思っているのが現状でございます。そのようにしながら、三重県の自然や歴史、文化などについて、子どもた

ちが、一定学べる、一定楽しみながら身につけていけるようなものを上手に活用しながら、郷土、三重が持っている素晴らしいものを子どもたちが自分の宝として身につけていけるような教育を推進していきたいと思っています。

一方で、お手元の資料の４ページあたりに進んでいただきますと、今度は反対に、国際化、グローバル化に対応した郷土教育についてというもう一方の視点が出てくるかと思います。地域を愛し、地域の担い手となる人材を育成する一方で、国際化、グローバル化や高度情報化社会の進展に対応できる人材の育成を目指し、英語コミュニケーション能力や情報活用能力の育成等を図ることも大切です。今現在、県内の小中学校のなかにも外国の姉妹都市の学校と姉妹校として交流しているところもございます。そういうときに何を話すかというと自分の所のことを、自信をもって発信していくことが必要だと思います。そういう点からも郷土教育というものをみていかなければならないのではないかと思っています。今年度作りました「三重の文化」が有効に活用されて、またさらに「美し国かるた」が、まだ呼び方は仮称ですけれども制作できたらと思って進めています。

（事務局）

お手もとにカラーでコピーさせていただいた資料があると思います。これは、現在「三重の教育」というホームページの中で検索できる形になっております。このホームページの開設は４月からでございますが、最初「三重の文化力を学校へ」という合言葉で、教育委員会の室を横断したプロジェクトの形で、平成２１年から議論を始めまして、進めてきたところでございます。本物の文化体験を通して子どもたちが感動することが、創造力豊かな感性を育む、あるいは、コミュニケーション力を強くする、あるいは郷土に愛着を持ち、誇りに思う気持ちを作るということでございます。文化の捉え方ですが、幅広く音楽、絵画などの芸術に加え、人と自然の関わり、人々の歴史、現在の暮らし、こういったものも文化と捉えています。本物の体験を通して、感動していただくということです。このホームページは、こういった本物文化を体験するプログラムを、学校に紹介するというものでございます。現在ここでは、県の１２の部局等で学校に役立つのではないかと企画しているプログラムを、紹介させていただいております。現在７４ほどのプログラムを紹介させていただいておりまして、特徴を選択して検索できるようになっております。検索方法につきましては、表紙のところからジャンル、校種、学年、あるいは使える教科、活動、種別、施設、こういったものからも引けるようになってございます。具体的な中身につきましては、例えば歴史・文化財というジャンルで、斎宮歴史博物館等でやっております体験発掘や、生活・文化部でやっております次世代文化体験、活動事業の中で博物館資料を生かした出前授業などを紹介しております。学校の先生方がこういうものを学校に取り入れていただくにあたって、こういったプロジェクトをまずは知っていただく、使っていただくことが大事ではないかということで、こういうホームページを開いて、知っていただくように努めようと、スタートしたものでございます。

（事務局）

高等学校の場合は小中学校と違いまして、生徒が広範囲から通ってくるということ、専門学科で、目的に応じて専門的な職業教育を学んだりすることもありますので、全校生徒をあげて、「みんなで郷土教育をしましょう」という形での取組は、なかなかできにくいというのが実情です。今回、資料として出させていただきましたのは、高校教育室所管の「元気な三重を創る高校生育成事業の成果について」、というものを用意させていただきましたので、ご覧いただきたいと思います。

高等学校の場合は、学科やクラブ活動などで、高校生だからできる専門的なもの、学習内容を深めるような取組をやっていければということで、取り組んでいるものがあります。「元気な三重を創る高校生育成事業」というのは、昨年度までの５年間の事業計画で取り組んできたもので、そのうちの一つに「地域との絆をはぐくむ高校生支援事業」というものがございまして、そこで取り組んだ内容がご覧の一覧表になっています。網掛けをしてあるところが、郷土教育との関連が図れているものとして示させてもらいました。例えば、３段目白子高校がありますが、白子高校には県内でも珍しいものですが、吹奏楽コースというものがございます。この吹奏楽コースで学ぶ生徒が、創作ミュージカルを作りまして、それを年に１回、年度末に地元鈴鹿市の文化会館で公演をしています。この取組の内容は、大黒屋光太夫を取り上げております。地元の偉人である大黒屋光太夫の一生をえがいたようなミュージカルを通じて自分たちも学び、公演を通じ地域の方々にも知っていただくということで、音楽と併せて取り組んでいるかなり大がかりな取組でございます。まん中より下の名張高校では、以前市役所の観光課の方の協力を得まして、「名張街中ナビ」という散策マップを、Ａ４版両面刷りで三つ折りにした形で作りました。江戸川乱歩の生家などを中心に、一般の人が見ながら、名張の町を歩くことができるようなものを作成して、自分たちも郷土のことを知

り、そしていろんな人にそのことを発信できるようなものを作る取組をしていたりしております。
　このような形で高等学校の場合は限られてくるところがあるのですが、地域、地域でいろいろな取組をしている例があります。それを推進していくために、今後も地域との絆を育むテーマの中で、事業を作りまして、各学校が地域性や独自性と併せて取り組んでいけるような内容で、進めていきたいと思っています。できれば県内６０校弱の県立高校があるわけですけれども、その学校すべてで、何らかの形で郷土との関わりを持ち、それを成果発表できるような機会を作っていければという方向で考えております。
（事務局）
　最初の資料、コミュニティ･スクールの資料一式でございます。まずこのパンフレットですが、これは文部科学省が作りました、コミュニティ･スクールを広げていくためのパンフレットで、ご参考までに３ページと４ページをお広げください。全国のコミュニティ・スクールの導入数がございまして、今年の４月１日時点で７８９校、全国の幼稚園から高校までの公立学校園が指定がされております。三重県の状況は、右側４ページの下の方をご覧いただきますと、県立紀南高校からはじまりまして全部で４９校でございます。５月１日で、志摩市鵜方小学校が指定となりましたので、今現時点では、三重県では５０校がコミュニティ・スクール導入ということになっております。
　では実際にコミュニティ・スクール校において、地域の資源ですとか地域の方のご協力を得て、どんな文化教育、郷土の教育をしているかという例ですけれども、６ページの上段にあります、例えば、東京都三鷹市のにしみたか学園、ここは小中一貫でもやっておられるところですけれども、写真で載っておりますが、「日本の伝統文化を学ぶ」ということで、地域の方々が学校にやってこられて、着物の着付けを子どもさんに教えていたりしています。また７ページの上段には、長野県上田市立浦里小学校の例として、ＰＴＡの方も入って地域で、子どもに田植えの体験をさせています。あるいは８ページの右下、川崎市立の小学校においては、食育の一環として地域のまつりにおいて、地元の方の協力を得て、地場のものを使った食材を体験するということなど、こうした、コミュニティ・スクール校における郷土教育の取組事例としてご紹介させていただきます。
　次の資料は、三重県内の現在のコミュニティ･スクールの指定の一覧でございます。これはまた、後日ゆっくりご覧になって下さい。続いての資料裏面、県立高校で県内唯一、全国でも４校しかない高等学校で指定になっています紀南高校の取組を紹介させていただきました。紀南高校では地域の方の協力を得て、たとえば食文化の継承ということで、御浜町の食生活改善推進協議会さんとの連携授業を行い、地域の食文化に触れることもしております。
　次の資料ですが、これは一番直近の５月１日にコミュニティ・スクール指定になりました志摩市立鵜方小学校の事例でございます。学校だよりを発行されているのですが、「コミュニティ・スクールが始まりました」ということとあわせて、子どもたちが地域の田んぼに行って、地元の人たちの協力を得て教えてもらいながら田植えの実習体験をしている様子ですとか、その下には地元の魚を使って給食の指導の中で地域の食材を学んでいる様子、それから、次のページには「鵜方小学校だより」と書いておりますが、年１回学校祭りが開かれているのですが、そこに地元の方が来て、たとえば手作りの獅子舞を作って、これを指導して、子どもが体験している様子が写っております。最後のページには、同じ学校フェスティバルで、正月の飾りもの、稲わら細工を、地域のご年配の方が中心となって教えていたと、こういうことも郷土教育の中の取組として行われております。
　最後、一番後ろのＡ３版のカラー刷り資料ですが、これは京都市の御池中学校、御所南小学校、高倉小学校の３校で、小中一貫教育を進め、かつコミュニティ・スクールをやっているということで、２年に１回全国大会が開かれている非常に有名な学校なのですが、一昨年の大会に行ってきた時の写真でございます。学校の中にいろいろなものが置いてあるということで、例えば祇園祭の大きな山車です。これ非常に大きなもので、こういったものが置いてあったり、京都ならではだと思いますが、扇子に地元の祭の様子が書いてあったり、また、右下にはお坊さんの写真が写っているんですが、これは近くに本能寺がありますので、そこのご住職が「本能寺の変」のいわれも含めて子どもたちに教えてくれますということでした。裏面には、そうした人たちを「地域の達人」として、この地域にはどんなことを教えてくれる達人がいるのかを一覧にして、その方の顔写真を合わせて貼ってあるような展示もされています。こうした、コミュニティ・スクール校における取組事例としてご覧になっていただければと思います。
（座　長）
　それでは、全体質疑・審議に入る前に、ただいま教材「三重の文化」「美し国かるた」、「本物文化体験教育」、「県立学校における取組」、「コミュニティ・スクールにおける取組事例」等の資料につ

いてのご説明がありました。この資料につきまして、何かご質問がございましたらお願いします。
　では私から、「美し国かるた」ですが、これはパブリックコメントを一応やるんですよね。三重県教育委員会だけで勝手に決めたら、漏れたところは多分問題になるので。
（事務局）
　それも含めて、今から進めていきたいと思います。
（座　長）
　できるだけ多くの意見を聞かないと多分揉めると思います。「上毛かるた」は外れた所はどうなのでしょう。
（中　村）
　作られたのが昭和２２年なので、その辺の配慮はなかったと思います。今では全然登場しないと文句が出るのかもしれませんが、市町村名が全部出てくるわけではないので、こだわらなくても良いのではないかとも思います。若干この『三重の文化』は、平等観で何もない市町村に関して、マイナーなものを置くきらいがあって、これは違うのではないかと思うものもあります。逆に私の勝手な意見ですけれども、それにこだわるよりは、みんなの気持ちに通じるもの、後世に伝えたいものを優先した方が良いのではないかと思いました。
（座　長）
　方法論は、じっくりとお考えください。
　それではただいまから、全体審議に入っていただきたいと思います。ご質問、ご意見等、どうぞ遠慮なくお願いいたします。
　私から一つなんですけど、中村様のお話を聞いて、小学校での郷土教育の必要性を痛感いたしました。現在はご存じのとおり、中学、高校も３間がないと言われています。時間もないし、空間もないし、仲間もいないということです。中学、高校になってくると、自分の世界に入って、ゲームに入ったりして、仲間がなかなかできない。時間も空間もない。前回も「郷土教育は県単位であるのか、市町単位であるのか」という話をさせていただきましたけれども、小学校の郷土教育はインパクトがあるんですね。私も小さい時に、小学校の先生に経験させていただいたことが、郷土教育の根幹をなしているのではないかと思います。そういう意味で小学校レベルでの郷土教育の充実が要求されるのではないかという意見を持っております。
（委　員）
　私もつくづくそのように思います。小学校のときは、感受性が強いのではないかと思います。今日、中村先生の話の中で白米城にふれられました。私も小学校１年生ぐらいの時に、おじいさんから「なぜ白米城という名前がついたか」の話を聞きました。それをいまだに覚えております。父親になってから自分の子どもを連れて２回、白米城に登り、その話を子どもにしました。小さい時に感動した話は、大きくなってもずっと心に残っていくのだと思います。そういう意味からも、小学校時代に郷土教育を学ぶことはとても大事なことではないかと思います。
（座　長）
　さきほど、田畑さんのお話が出ましたが、松阪には郷土教育に係わっている有名な方がいらっしゃるんですよね。中村先生には郷土教育について、いろいろなご経験談をお話しいただきましたけど、ベースはそれを教えてくれたという師匠、立派な人材がいらっしゃったことが重要ではないかと思いました。そういう意味では、教員の資質の向上をお願いしたいと思います。立派な先生たくさんいらっしゃいますから、学問、教育だけでなく郷土教育の方にも力を入れていただきたいと思います。
（長野総括）
　受け止めて改善させていただきます。
（委　員）
　私も同じ感想で、重複して申し訳ないのですが、小学校で教えてもらったことがベースになったとお聞きして、自分も振り返ってみると「そういうことあるな」と思いました。小学校の小さいときに本物に出会わせるということを大事にしていくのは、本当に意味のあることだなと思いました。自分が幼稚園に身を置いているものですから、ついつい幼児の立場でものを考えてしまうのですが、小学校のお兄ちゃんお姉ちゃん、あるいは中学校のお兄ちゃんお姉ちゃんが本物の文化に出会っていくのに、一緒につられて体験する「つられ体験」も、幼児期にはすごく大事だと思っています。小学校、中学校でのそういう教育に幼児もつられて、一緒に出かけていってお兄ちゃんお姉ちゃんが、疑問を感じたり、楽しいなと取り組んでいく、受け止めていく、その様子を身近で見て、「大

きくなるってこんなことかな」と感じていくことも、幼児期ではすごく大事だと思います。この文章の中に幼稚園の字がないのが残念でしかたがないのですが、幼児期、幼稚園の教育は、何かを教えられて学んでいくというよりも、自分から周りの環境に心が働きかけて、見ようとして受け止めることを大事に育てていこうとしていくものです。その中で主体的な心の態度が育ってきます。幼稚園の時は、自分からものに関わって、自分のまわりの環境にかかわることが、ほとんどですから、ちょっと上のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが受け止めていく姿につられて体験させていただける機会を作っていただきたいと思います。

自分の小さいときのことを思い出すのですが、昔は子ども会の活動がすごく盛んで、地域の面倒見の良いおじちゃん、おばちゃんが、毎年１回は町内の子ども会のバス旅行に一日連れて行ってくれました。ちょっとした文化に触れて、楽しいことも味わって、食べることもあって、１日を通して人と触れ合いながら、地域の身近な範囲内の文化に触れることが、昔はありました。今は子ども会の活動が全部なくなっちゃって、さみしいのですけども、地域の中で誰かが面倒をみてくれて、いろいろな年代の子たちが混じり合う中で、そういう経験できたことが、なつかしく思いだされます。そういうことでの体験は、すごくインパクトがあると思うんです。食べることもあって、ふざけあう内容もあって、そしてちょっとだけ文化に触れて、大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんがしゃべっていることは訳がわからないけど、なるほどと思ってみたり。こういうことはすごいことだと思います。そういうことを考えると、地域が郷土の文化を取り入れて教育していくことを支援するような方向も、考えていただくと良いと思っていました。

それから、中村先生が講演の中でおっしゃられたクイズ、「答え合わせは１９日に」という仕掛けを聞いて、主体的な気持ちでものにかかわっていく時、受け入れる時は、ものすごく楽しいと感じて、なおかつ「ここはよく分からない」という追求したくなる気持ちになることを再確認しました。楽しい経験と、何かを追求したいという気持ちがわき出てくるようなメニューを、小学校の低学年で実施してもらって、そして、幼児期もつられ体験をさせていただくと、より広がっていくのではないかと感じました。

（座　長）

幼少期からも重要ですよね。

（委　員）

私も６才になる小１の子どもがいるのですけども、保育園で学んできたことが一番身についていて、今、ものすごく素直な時期だと思います。「保育園から」とおっしゃったことは、すごくよく分かります。素直に何でも受け止める時期に体験したことは全部覚えているし、それをもって、小学校に臨んでいるので、「保育園」という文字がここに入るのはすごく良いご意見だと思いました。今モクモクでは食文化を伝える活動をしているのですけども、小学校の低学年の時期からすべてを教えていった方が、体験として良いと感じております。また、小学生の低学年の時期から学ぶべきことと、高学年の時期に学ぶべきことがあるので、別々にカリキュラムを考えた方が良いかと思います。

（座　長）

郷土教育の方法も少し変わってくるのではないでしょうか。個人的な話ですが、昨年紅白歌合戦見ていて、「あなたも投票しましょう」ということで、赤とか白をｄボタンで選びました。郷土教育の情報発信の仕方は、今は一方的ですよね。大学教育や大学院教育では、一方的授業ではなく、お互い話し合う「多方向」の形で議論させたりしています。さきほどおっしゃった明倫小学校は、こちらが情報提供して、あちらからの情報を取るという形ですね。一方的に「こうやっています」と情報提供するのではなくて、クイズ形式ということは、相手もそれにのってくるという、双方向の情報発信形態かと思います。地上デジタルでいうｄボタンのように、今までの一方的な情報発信ではなくて、相手方の意見も吸収するような形の双方向での情報発信の方法、子どもと対話するような形で持って行くのが、今後、郷土教育をするための、今後のやり方のひとつの方向性ではないかと思います。郷土教育も情報だけ流すのでなく、子どもたちから情報を受け取るという、そういう形での郷土教育をするのが、一つの理想形かもしれません。「上毛かるた」は、我々が一方的に話すのではなく、多方向ですよね。子どもたち同士で情報を提供したら、子どもたち同士で多方向で郷土教育をするという方法論ですよね。そういう意味でこの「上毛かるた」は、多方向で郷土教育できるあり方として、非常に新しい形ですね。この「上毛かるた」は、地上デジタルのｄボタンを想定した画期的な方法だったんですね。先人が非常に画期的な先見の明をもっていたという、それが「上毛かるた」ではないかと思います。双方向教育も、ひとつの視点として入れておいていた

だきたいと思います。
（中　村）
　小学校での郷土教育が重要だからといって、中学校や高校が何もしないで良いというわけにはいきませんよね。さきほどの説明にあったコミュニティ・スクールとか、「指定されたから、選ばれたからやっている」というだけではなくて、ちょっとでも良いから何かをやるという気構えは、持って欲しいと思いました。選ばれたところだけ、頼んだところだけがやっているのは、無責任で残念な感じがしました。
　運動会も、一時は競うのをやめていたけど、「運動で優れていたら、褒めましょう」と、この教育ビジョンに書いてあって、「上毛かるた」もうちの群馬出身のスタッフに「なんでそんなにみんなが覚えることになるんだ」と聞いたら、エリア別に競うんだそうです。私が小学校の時には、町別対抗リレーがあったんです。これはかなり応援の親ごと燃えるんです。結局人数が多い町がいつも勝つのですけど。「上毛かるた」もそうらしいです。もちろん家でも練習するのですが、そのエリアでチーム戦の練習をしておいて、エリアごとの競技会があって、県で大会をするそうです。だから、気持ちが入るところがあると言っていました。
　それと「かるた」の遊び方を見ていて感動したのは、「こういう趣旨で作ったかるただから、勝敗にばかりこだわらず、礼儀正しく、正々堂々と協議して、お互いの品性を高めるように楽しく遊びましょう」とか、「協議の始めと終わりにはお互いに礼をかわしましょう」とか、「相手に不満があっても直接言い争いをしないで、審判を通じて堂々と意見を述べましょう」とか、書いてあるのです。それも素晴らしいと思いました。ただの「かるた」ではなく、役札っていうのが、マージャンのようにあったり、地名が入った「上毛三山」の札は、３つ取ると何点みたいなルールがあって、単純に枚数だけじゃなくて、最後に逆転ができる仕組みもあるようです。そういうおもしろくい遊び方も工夫されていて、これは途中から作ったルールかも分かりませんが、すごいなと思いました。「美し国かるた」でも、良いことは全部真似すれば良いと思います。
（委　員）
　「かるた」は何年生ぐらいを対象としているのでしょうか。これからは国際化の時代です。「かるた」の裏に英語で説明が書いてあると、中学生ぐらいになると英語も同時に覚えるのではないでしょうか。
（座　長）
　児童用、生徒用を作るということですね。
（委　員）
　どの学年から適切かは、私にはわかりませんが、「かるた」で英語を覚えると大人になってもきっと覚えていることが多いのではないでしょうか。
（座　長）
　これは、小学校高学年ぐらいでしょうね。
（中　村）
　昭和２２年に考えられた人のことは、よく分からないのですけれども。
（座　長）
　低学年ではないでしょうね。
（中　村）
　さきほどの朗唱と同じように、あまり意味が分からなくても、分かるものもあるので「大人も子どももやる」ということだと思います。研究がそこまでできていません。結構、見ていると奥が深いなと思いますし、ホームページ見ていたら、英語版もあるみたいなことが載っていました。
（委　員）
　学年が大きくなり、例えば中学生ぐらいになった時、日本語で書いてある「かるた」の裏に英語で書かれていたら、興味をもった生徒は覚えていく良い機会になるのではないかと思います。
（座　長）
　そういう視点も面白いかもしれませんね。
（委　員）
　「英語でやりなさい」というわけではありません。
（座　長）
　今、名古屋地下鉄の駅では、日本語、英語、ポルトガル語、中国語と５回案内が流れてきますよね。日本には、ブラジルの方が多くいらっしゃいますから、最低、英語を裏に付記すると、外国に

行ったときに説明できますよね。英語を付記すると、グローバル化に役立つかもしれないですね。
（中　村）
　高校生とか中学生ぐらいになると、観光の分野では動画を撮って、例えば三重テレビの人に編集の仕方を教えてもらって、自分たちの好きなものを撮って、テレビ番組やユーチューブとかで動画をアップしているのですが、そういうことなら興味を持ってくれるのではと思いました。青森県の農家民宿をやっているところの話で、大阪の街の子たちが来るのですけど、３泊４日ぐらいの最後には絶対泣くんですよ。泣かせちゃうおばちゃんがいるんです。それを地元の高校生が他所から来た高校生や中学生を撮って、それがまた県内でコンテストになっていて、結構おもしろかったです。
（長野総括）
　発信がひとつの課題になっておりますので、学年が上がるにつれてできることです。
（中　村）
　今こっちでも放送していると思いますが、「秘密のケンミンショー」という番組があれだけ続いていて人気があるのですから、あまり興味がない年頃の子には、そのノリでも良いのではないかと思いました。また、ユルキャラにもなんとなく文化や郷土が入っているでしょ。勝手に形を作っているわけではないし、そんなものでも良いと思いました。ちょっと前にブレイクした「あられにお茶をかけるのは松阪と伊勢だけ」と、そういうところの感覚も入れてあげると良いのかなと思いました。
（座　長）
　食文化が一番違いますよね。
（中　村）
　教材として一番良いですよね。
（委　員）
　この「三重の文化」の映像版があれば良いなと思いました。見て、読むだけでなく、聞いて動画を見るものもあると良いなと思います。
（中　村）
　高校生にそれを、作ってもらったらどうでしょう。
（委　員）
　伊賀であれば、ここに載っている組紐、芭蕉、伊賀焼、忍者の４つは、博物館に行けば映像があります。そこに行けば見られるということを、もっと有効活用できればという気がします。
（中　村）
　確かにこれ、いきなり「あとは勉強しましょう」みたいになっているのですけれども、観光パンフレットなら、「どことどこに行けばそれが見られますよ」という情報が、多分ここに補足で載ると思います。観光パンフレットは観光パンフレットではなくて、何かそこはうまくミックスできると良いのではないかと思います。
（委　員）
　説明の中に、探求心をくすぐる一文を入れてもらって、探求できる方法もちょっとヒントが入っていたりすると良いのではないでしょうか。
（中　村）
　インターネットで公開いているんだったら、観光の方とリンクを貼れば済むことです。「なぜこの『三重の文化』の文章がすっと入ってこないんだろう」と思ったら、それぞれの項目にキャッチがないからだと思いました。松浦武四郎の説明を全部読まないと、どういう人か分かりません。松浦武四郎がまず、「北海道の名付け親」というだけでは邪道かもしれませんけれど、多分週刊誌とか新聞の広告とか見ると、「なぜこれが載っているのか」が分かるようになっています。「日本一やかましい祭」にしても、地元の人は知っていても、他の地域の人は「そんな日本一って、また嘘ついて」としか思いません。でも「どうやかましいんだろう」と思えるようなことがかいてあれば、興味を惹くと思います。これをインターネットで公開するとか、何か他の広報に載せるという時に、そこを抜粋することに異論がある人がいるかもしれないけど、そういうキャッチをつけないと、どれをまず読もうという気にならないのではないかと思います。
（長野総括）
　「北海道の名付け親」というのは、松阪ではそこらで言っていますし、発信もしているのですが、ここに記述がないですね。
（座　長）

これをベースにして、いろいろな情報発信ができるのではないですか。良いものを作りましたから、より一層活用できますね。
（中　村）
とても本当に良いもので、もらって行って良いなら、持っていたいと思います。
（委　員）
中村先生が町別対抗というお話されていましたけど、伊賀では天神さんの出し物の大きな「だんじり祭り」がありまして、だんじりに乗る小学生が、町別に練習をして競い合うわけです。でも、今祭りに参加する子どもがどんどん減っているんですね。昔は「必ず参加する」という子どもながらの気持ちがあったものが、今どんどん減ってきています。「その祭りに参加する町だけは学校を休んで良い」とかあったのですが、そういう祭りごとなどの部分を、学校がもう少し推進できるような方法があればと思っています。
（座　長）
先ほど異文化交流とかおっしゃいましたが、県内、県外との子どもたちの交流経験も重要なんでしょうね。
（中　村）
外国人にいく前に、例えば東京から来た子に何かを説明してあげようと思って、できるかという問題があります。三重県に連れてきて何を見せたいか、というのも結構考え込んでしまうかも知れません。
（座　長）
県内にいるときは、市町村が自分のベースで、県外に行くと県がベースとなってくるのでしょうか。
（長野総括）
学年とともに、だんだん広がってくるのでしょうね。
（座　長）
三重県に外国の人が来たときには、三重県からいきなり入るのではなくて、津市とか市町村単位で入るしかないのでしょうか。子どもたち小学校の時には、市町村単位で異文化交流するのでしょうか。県レベルではしないのでしょうか。
（中　村）
県全体まで知るほど行動範囲が広くないので、市町村単位でしょうね。
（委　員）
伊賀だけは特殊で、海外の人は「忍者」ということで、三重県ではなく伊賀と大きく入ってきます。地域性があると思います。
（座　長）
グローバルですね。「忍者」という言葉は日本語として世界に通用するんじゃないですか。
（委　員）
日本には、茶道とか華道とか、「道」というものがあって、伊賀とか松阪は茶道文化が盛んにあって、それによって和菓子屋さんや食堂があったり、道が碁盤の目になっていたりとか、私自身も小学生の時点から茶道に触れていました。そういった「道」も、教育文化の中で地域によって変わってくるかと思います。それも日本にある大事なものだと思います。
（長野総括）
お話の冒頭で、「誰かと仕事をしていくときに、より深いコミュニケーションが必要だ」とおっしゃって、「その時に郷土を持っている者は強い」という意味に受け止めたのですが。私どもは「国際化」とか、そういうことで大上段にかまえて物事を考えてしまうのですけども、足元のところで体験して、実体験として小さいときから郷土を持っているのは、すごく大きいことだと思いました。そういう点で、三重県というのは縦に長くて４つの国があると教えていただきました。あまりそんなことは考えたこと無かったんですけど、確かに川を越えると急に言葉変わるんですね。三重県というのは本当に多様な所がある。そういうところは見つければ一杯出てくるので、普段の授業でもすべての教科の中で見つけてやるということを、今日勉強させていただきました。
（座　長）
調理の時の食文化とか、すべての教育の中で郷土教育できますよね。
（長野総括）
社会とかひとつだけじゃなくて、国語でも算数の中にも出てくると思いますし、すべての学校教

育の中で郷土教育を変えていけるきっかけがあると学ばせていただきました。
（座　長）
　大上段に、郷土教育という言葉を使わずに、普段の教育の中で郷土教育ができるという話ですね。中村先生が第一小学校で体験されたことですよね。
（中　村）
　小学校ではいろいろなことをしていて、あれで大丈夫だったのか、ちゃんと卒業したのかと思うぐらい、本当に多かったです。多分今とは学習指導要領も全然違ったと思うんですけれど、阪内川へ今日は魚とりに行こう、みたいなこととか、松阪の初午祭りの日は、学校が休みでした。「参加しろ」ということだと思いました。
（座　長）
　郷土教育は郷土教育という形でやるんですか。人権教育も「人権教育をするぞ」と言うと、みんな身構えちゃうんですよね。同じように「郷土教育をするぞ」と言うと身構えちゃうかもしれないのですが、事務局の方は郷土教育の仕方を、どう考えているんですか。すべての学校教育を通じて郷土教育をするという形でよろしいですか。
（長野総括）
　私の個人的な考えですけれども、人権教育も、「人権、人権」と構えて行くと、敷居が高くなってしまうのですけども、すべての教育の中でそういう観点をもってやることが必要であると、勉強させてもらっています。それとも繋がって、郷土教育もこういういろいろな冊子が要らないとは言いませんけれど、いろいろな所でベースとなるものとして、教師がそういう糸口を持って、おもしろいところを開発していって、その上での仕組みが必要だと思います。
（中　村）
　「県庁内他部局との連携ができていない」みたいなことが、前の資料を見ると書いてあったのですが、例えば三重ブランドの関わりの中で、東京へひじきを売り込むのも良いけど、県内の子どもたちに三重県のひじきを食べさせる機会はないのかとか思います。三重ブランドとして選ばれた三重県のひじきは、観光の分野では、マスコミ相手に東京で韓国産ひじきや長崎産ひじきと名前を隠して、「どれが美味しいですか」「味が違うでしょ」みたいな食べ比べの試食させてくれたりします。このようなことを、地元でもやれば良いのにと思います。
（座　長）
　工夫次第ですね。
（長野総括）
　部局横断の話はそうですね。今、新しいことで、いろいろ頭をしぼっている所ですけれども、なるべくこういう方向でやれるようにしたいと思います。
（座　長）
　それも１つ、食文化なんか特に重要ですね。
（委　員）
　体験教育は課題によって取り組み方は変わると思いますが、例えば、現在も農村や漁村などに宿泊しながら行われることはあるのでしょうか。自分の小、中学生時代をふりかえる時、宿泊をしながら体験教育をしていただいた思い出は長く、また印象深く心に残るように思います。
（長野総括）
　キャンプなんかは小学校でやっています。
（事務局）
　実は昨年から、豊かな体験活動という、農山村漁村などに行って３泊４日以上泊まって体験しましょうという、ひとつの推進事業があります。今おっしゃっていただきましたように、１泊２日でしたら良いのですけれども、これは３泊４日以上というしばりがあって、体験の期間が長く、皆さんからの応募が今年は無いということです。学校はそれぞれの形で体験、宿泊体験を行っています。
（委　員）
　私も中学時代３泊４日の体験教育に参加させていただいたことがあります。その地の生活習慣に触れ、初めて経験することが多く得るところが体験多かったことを今も懐かしく思い出します。
（長野総括）
　私も子どもの頃、いるか島へ１泊でキャンプに行ったことをいまだに覚えています。でも各学校、何泊か泊を重ねる体験は、なかなか取りにくくなっています。以前私がいた小学校は５泊６日で紀

州の山の中、保護者が絶対来られないような山の中へ連れて行って、キャンプをしていたのですが、３日目ぐらいから子どもたちは普段と違う表情が出てきます。地域の学習もいろいろできますし、値打ちがあったと思うんでのですが、もう今は、先生たちがそれだけの日数を、安全確保ということがあるので、子どもさん預かって、そこまではできていない状況があります。

（委　員）

今、お話のあった紀州の山の中でのキャンプに、私の子ども２人が体験させていただきました。キャンプから帰ってきた時、子どもが逞しくなった、という印象を強く感じました。

（長野総括）

子どもたち、ガラッと表情が変わるんですね。我々も３日ぐらいで限界がきまして、本当にしんどくなってくるんです。４日目ぐらいからもうあきらめて、体が慣れてくるんですけど。やはり１泊では駄目ですね。

（中　村）

３泊だと行けない人とか、「世話が大変」とかいろいろあるからだと思うのですが、私が小学生の時には、校内キャンプがありました。途中で、お母さんと離れて寝られないと言って泣く子はお母さんに迎えに来てもらうと。学校の校庭でテントを張るんです。キャンプファイヤーをする。４年生は学校で１泊、お母さんと離れて寝る体験をする。寝るのは本当に校庭です。５年生になったら、大杉谷に本当にキャンプに行く。４年生は学校で肝試しをやりつつ、運動場に寝る。それはそれでお金もあまりかからないし、楽しかったことは楽しかったです。

（長野総括）

１泊程度ですと、そのときに地域の方も来ていただいて、いろんな体験活動をさせていただける。それは、今でもやっていると思います。ただ２泊、３泊と重ねる形はなかなか難しいと思います。

（座　長）

それでは終了時間も迫ってまいりましたので、このあたりで、第３分科会の協議を終わらせていただきたいと思います。ゲストの中村様におかれましては、大変貴重なご講演いただき、お忙しい中、ありがとうございました。改めて講師の中村様に感謝の意をこめまして、拍手を。

（中　村）

つたない話で失礼いたしました。

（座　長）

それでは、委員のみなさま方におかれましては、熱心なご論議ありがとうございました。

あとは、事務局にお返ししいたしますので、議事進行をお願いいたします。

（長野総括）

皆川座長、ありがとうございました。また、中村様、本当にお忙しい中、良いお話をいただきまして、ありがとうございました。

最後に、次につなげる意味で、何点かご意見をまとめさせていただきたいと思います。さきほども申しましたが、中村様から本当に多岐にわたる良いお話をいただきまして、私どもも、松阪をもう一回、今日見直してみたいと思います。より深いコミュニケーションを取っていくうえで、郷土を知るということは、とても大切であるということが分かりました。他と比べて何がどうだということをきちんと自分で押さえていかないと、駄目だろうと。それを我々が教育で押さえていかなくてはならないと思いました。

また、三重県の特性として、言葉だけでも多様な言葉があって、縦に並んで４つの国があって県内で異文化体験ができます。特に伊勢高校は南の方の人が集まって来るので、非常に珍しい場所かと思います。

それから、小学校の時の教育の大切さを教えていただきまして、特に当時第一小学校は、多分松阪地域だけでなく、三重県でも先進的な教育をしていたのではないかと思います。戦後、当時新しい教育を作っていこうという機運もある中で、ずいぶん先生方もがんばっていたんじゃないかと思います。小学校のときの体験、それとあわせて、幼児期から小学校にかけての年齢に応じた体験がとても大事であるということを教えていただきました。

それから、「上毛かるた」のことについていろいろとお教えいただきました。明倫小学校の例とも併せまして、小さい時からそういう文化に親しむことが必要だと思いました。「読者百遍意自ずから」というので、昔、日本の教育はそういうことが行われていた部分があったと思うのですが、自分たちはそういうことを忘れてきたのではないかと思います。逆にそういうところに目をあてて、小さい時分からなくても、それを読んで声に出して覚えるということは、とても大事じゃないかと

いうことで、今後、三重県もかるたを作っていくわけですけれども、生かしていければと考えました。

それから、小学校の郷土教育の必要性も伝えていただきました。特に、感受性が非常に高い時期の教育は、それがベースとなっていくものである。保育園とか幼稚園の幼児については、小中の子どもたちにつられて体験というのも、今日教えていただきました。あまり頭になかった考え方ですので、とても勉強になりました。

それから、地域のなかでいろんな人材の活用もあろうかと思いますが、地域でそういうことをやっていくことも大切であることも、教えていただきました。

かるたのことで、情報発信については、双方向とか、いろんなやり方があるのではないかと。ｄボタンという話も出していただきましたけど、その辺で仕組みや枠組みやそこでのルール作りとか、考えられることがあるのではないかということも教えていただきました。

中学校、高校になると、子どもたちも変わってまいりますので、小学校と同じようにはいかないであろうと。その中では、動画などで体験を発信させるような活動が大事ではないかということを、教えていただきました。

子どもたちの中で活動して、いろいろな探求につなげていくようなことも必要であると、教えていただきました。

いろいろなお話を出していただきましたので、事務局で整理させていただきまして、次回につなげていきたいと思っております。

それでは最後に、次回の会議について、ご連絡させていただきたいと思います。

９月後半での開催を予定しておりましたが、先日調整をさせていただきまして、９月２６日の午後開催ということで、決定させていただいたところです。津市での開催ということですが、時間等も含めまして、後日ご案内をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。また今日も、いろいろ中村様にお教えいただいたのですが、次回９月２６日は、中村様もお忙しいので難しいかと思いますけれども、またどなたかゲストをお招きするかどうかということにつきましては、もう日にちも迫っておりますので、スケジュールとか難しいことがございます。皆川座長ともご相談させていただくということで、考えております。

（事務局）

一点、机の一番下の方にスケジュール表を置かせていただきました。第１回の８月１１日の会議で配らせていただいたものと同じですが、右が分科会の予定です。８月以降、９月末まで集中的に３回やるということで、８月１１日が第１回、今日９月５日が第２回を開かせていただきました。次回第３回目は９月２６日の午後にお願いしております。ここで３回の議論の要旨を、「議論の骨子」という形でまとめさせていただいて、１０月の中旬に各分科会でまとめた「議論の骨子」を持ち寄った全体会議を開きたいと考えています。その会議を、こちらの都合で本当に申し訳ございませんが、１０月の１９か２０日のどこかで開かせていただけないかと考えています。恐れ入りますが、本日日程調整表をいただける方は、頂戴したいと思いますので、ご協力の方よろしくお願いいたします。

（長野総括）

それではこれをもちまして、平成２３年度三重県教育改革推進会議第２回第３分科会を終了したいと思います。本日はありがとうございました。

（閉　議　12 時 25 分）